

=====

はじめに2

-----2

宇野派原論の資本形式論への喰い足りないという印象。

『資本論』の「貨幣の資本への転化」は、剰余価値生産を論ずる「資本の生産過程」本論への導入となっている。流通形態論としての「資本」章の扱いについて、独自の構成を求められることになった宇野が採ったのが、資本形式論という理論構成であった。

宇野においては、こんどは「生産論」への橋渡しという役割が「資本」章に求められることにもなり、産業資本的形式の導出が焦点とされることになった。

流通形態としての資本概念そのものの掘り下げが必要なのではないか。価値形態論からの一連の論理構成の模索。

この報告の積極的主張の過半は、実際はすでに山口原論の中であっさりと言われてしまっているところである。したがって、目新しさはなく、いわば山口説の解題となっているとも見られるが、この説の射程において記号Pについての論点を扱うことで山口理論に不十分な面を見出していくことにもなる。

自説の展開2

=====2

W-G-WとG-W-G

『資本論』の「貨幣の資本への転化」の章では、W-G-WとG-W-Gのふたつの範式を比較するところから、資本の概念が導入されている。この比較は、増殖という契機の導入として論じられてきた。

しかし、商品と貨幣の形態的相違に着目するならば、W-G-WとG-W-Gという二つの過程は、そもそも簡単に同列に論じられないものであることに気付く。W-G-Wを措定するには、G-W-Gは当然には措定しえないのである。

価値形態論をはじめとする商品論・貨幣論の議論で明らかにされてきた商品と貨幣の流

通形態としての特質に着目するならば、W-Gとそれに続くG-Wは、貨幣によって接合することができるが、G-WにW-Gを簡単に接ぐわけにはいかないのである。

商品と貨幣

流通形態としての商品と貨幣の価値性格のありようについて、確認しておくことにする。

商品は交換に供されているものであり、価値実現とともに商品は商品ではなくなり、使用価値実現の対象となる。原則としては、生産物が商品となる場合、使用価値生産→価値表現→価値実現→使用価値実現、という順にステップが踏まれることになる。

価値表現において、商品は売りに出され、値付けされるわけだが、生産に先立って売りに出すことがあらかじめ予定されているにせよ、使用価値生産の過程の完了によってはじめて販売への条件が整うのであって、使用価値生産→価値表現の順は揺るぎないものと考えられる。

価値実現によって所有の移転があつて、商品ははじめて使用価値実現＝消費の対象となるが、そのとき商品はもはや交換に供されているものではなくなり、単なる使用価値物となっている。飲食の精算のように、支払いが消費の後になる場合も、価値実現→使用価値実現が転倒しているのではなく、支払いの形式のバリエーションの問題と考えられるべきであろう。

商品の転売は、価値実現がなされた後に改めて売りにだされているものと考えることができる。この点、次の小節でさらに検討するとして、貨幣についての確認に移る。

貨幣を流通手段として考察する際に引き合いに出される図、商品が流通界＝市場に価値表現によって登場し、貨幣を踏み石として命がけの飛躍を果たして流通界を飛び越え、消費の領域へと退出していくというあの図は、商品と貨幣の非対称な性格を明らかにするものであつた。交換という本来は対称性と親和的であるはずの関係が、貨幣と商品との交換においては非対称性が特色となるということ。そこで貨幣は、流通界に登場しては去っていく商品とは対照的に、交換を繰り返し経験しながら流通界に留まり続ける。

貨幣は、交換を経験する前も後も貨幣であるという点に変わりが生じるものではない。これは貨幣の独特の価値性格が商品の価値表現によってもたらされていることによるものであって、諸商品からもとめられていることによる価値の一般的性格と、直接的交換可能性に由来する価値の定在という性質が、貨幣を一般的富の定在として流通界に留めつづけることになる。

(※ 定在としての性格を主因に、一般性をも副次的要因として、貨幣は価値そのものの物

差しとなることができるのではないか。「価値尺度＝物差し」論の復権も考えうる。）

資本概念と価値の切れ目

資本の一般的定式は、 $G-W-G'$ とされる。

しかし、貨幣は交換を経てもなお貨幣であるが、商品は交換において価値が実現されるならば、理論上、商品ではなくなるものなのであって、 W をブリッジにして $G-W$ と $W-G$ 、ないしは $G-W$ と $W-G'$ を簡単に接いでしまうわけにはいかない。いったん、 $G-W/W-G'$ というかたちで過程を検討しておく必要があるのではないか。

商品の転売において、たとえば骨董品・美術品の鑑賞と転売のように、さしあたり当座すぐに転売することは考えずに商品の購入を行うことも考えられる。その場合、購入した商品は、書画が購入者のもとで鑑賞に供されるというようにして、使用価値の消費に入る。その後、転売の必要が生じるとすれば、あらためて市場に売りに出し、なにがしかの価格付けを行うことになる。したがって、この場合、価値表現→価値実現→使用価値実現→価値表現となり、やがてそこに価値実現が続いていく。購買と販売の間には切断面が明確に観察され、まさに $G-W/W-G'$ と見ることができよう。価値表現のやり直しを重要な契機と見出すことができ、これが最初の G と後の G' との量的差異をもたらすものとなる。

あらかじめ転売を予定して購買を行う場合、購買の後に使用価値実現の消費過程が続くことはない。しかし、異なる価格で購買と販売を行う以上、価値表現のやり直しという契機をそこに観察することができる。転売を予定している以上、いったん購買した商品は直ちに次なる交換に供されるべき存在となるのであって、ここでも商品であることをやめるわけではないが、価値表現のやり直しの契機として切断面を見出すこともできる。資本としての運動であることによる切断面の消極化。

この切断面に生産過程を挟み込む。

資本の価値

商品・貨幣・資本という流通形態は、それぞれ独特の価値性格をもっている。

資本も「資本の価値」を量的に想定することができる。それは、資本の運動体全体についての価値であり、商品（＝自ら販売している商品の店頭在庫を含む在庫）と貨幣のみな

らず、仕掛品や固定資本などを含んでの価値である。商品でも貨幣でもないこうした存在にも価値を見出すことができるのは、それらが資本の運動の一部を構成しているからであって、ここに評価という契機を含むものとしての「資本の価値」という概念が提起されることになる。

そこでは、循環への意志、循環の可能性、が評価の根拠として重視されることになり、具体的な量的規定は原価による認識を軸に方法が模索されることになる。

記号Pの価値性格

この評価による価値の大きさの措定という契機を考慮するならば、記号Pで表されてきた生産資本も、ある価値の大きさを担っているものと考えることができる。

「増殖する価値の運動体」という規定がより整合的となる。

材料2

====2

マルクス

『要綱』において、「価値喪失過程」の指摘。(資本論草稿集第2分冊の6-7頁など)

二つの価値喪失。相対的剰余価値の生産につながる価値喪失も指摘されるが、ここでの本論ではないとされる。本論として、「資本が貨幣の形態から商品の形態に、つまり実現されるべき一定の価格をもった生産物という形態に、移行してしまった、という価値喪失である。資本が貨幣として存在していたときには、それは価値として存在していた。いままでは資本は生産物として存在しており、観念的に価格として存在するだけで、価値そのものとしては存在していない。」という指摘がされる。

商品と貨幣の非対称な価値性格を問題にしているようであるが、「価値表現のやり直し」ともいうべき事態を指摘しているわけではない。

W-G-WとG-W-Gの比較は『経済学批判』でも行われている。

Pについては生産過程を表すものとしていることが多い。

マルクスは『資本論』第1巻において、宇野にいわゆるところの産業資本的形式の範式 ($G - W \cdot \cdot P \cdot \cdot W' - G'$) を一度も用いていない。宇野にいわゆるところの商人資本的形式と金貸資本的形式の範式はそれぞれ明確に「貨幣の資本への転化」の箇所において掲げられているが、産業資本的形式の範式は、「貨幣の資本への転化」はおろか、後の剰余価値生産を論じる部分や蓄積論においても登場していない。それがはじめて掲げられるのは、第2巻にはいつて資本循環論においてなのである。

『資本論』解説書において、「貨幣の資本への転化」や剰余価値生産・蓄積を扱う際に、産業資本的形式の範式（貨幣資本循環の範式）を掲げているとすれば、それは後知恵として第2巻の知見を活かしながら第1巻の内容を記述しているのである。

「資本の生産過程」の本論部分なり「生産論」が、産業資本的形式の範式の把握を踏まえた上で行われているものとされているのかどうかは、かなり大きな相違をもたらすものなのではないだろうか。

資本の一般的定式について述べた後、価値増殖の根拠を問いながら労働力の売買の議論から剰余価値生産について論じていくのが『資本論』の「資本の生産過程」論であり、第2巻「資本の流通過程」論ははじめて産業資本の運動の全体を捉え返すという意義を画するものとなっている。商品の価値の生産への着目から資本の価値への視野の拡大、生産過程の流通過程としての資本の運動全体への包摂という把握がここではじめて打ち出されているものとみることができよう。

宇野

宇野原論にあつては、産業資本的形式が流通形態としての資本の規定とはじめから関連づけられて捉えられており、資本による生産過程の包摂という視座が与えられた上で、生産論の展開に移行することになっている。生産過程は資本の運動全体の一局面であることが明らかにされたうえで詳しく扱われていく。この宇野の方法においては、「生産論」のなかで「資本の生産過程」が説かれた後に「資本の流通過程」が特に何かの視座を新たに提供しうるのかどうか、という問題が出てくることにもなる。

P mもAも含むかたちでの範式が資本形式論において提示されている。

山口

『資本論研究入門』の「貨幣・資本」

増殖根拠論において、流通過程における差額の発生を考慮の外におくべきではないとする。資本の概念を提起する段階では、個別資本の増殖が問題にされるのであって、そこでいきなり資本が社会的再生産の基軸となっている状態や労働力が商品化している状態を前提して議論すべきではない。

『経済原論講義』（山口原論）

1) 「価値の切れ目」の指摘

生産過程での費消。価値はいったん消滅し、新たに形成される。

商人資本的形式においても、価値の保存則があるわけではない。価値の切れ目はここにも存在している。

「価値の力学的な保存則のようなものが存在しているわけではないのである」

「資本家的活動によってそれは資本として連続的運動体となるのである」

2) 方法・体系の処理

いわゆる産業資本的形式を「商品生産資本の形式」とする。

三形式の順序として、産業資本的形式を金貸資本的形式の前にもってくる。

資本循環論を資本形式論へ、資本回転論を利潤論へ。資本循環論の変態論としての側面を資本形式論にとりこみ、循環の三形式論はなくす。

P_m や A を組み入れた範式は再生産表式論のところで初めて登場。

P は生産の表示とする。

流通過程における売買差額を増殖の要因として考慮していくにあたって、価値表現のやり直しの問題がクローズアップされることになり、「価値の切れ目」を説くことになったものと考えられる。

記号 P の意味

マルクスにおいても叙述において P の捉えかたに混乱がなしとはしないようであり、諸論者によっても P の捉えかたには相違がある。 P を生産資本とする場合、そこに変態途上のある価値の大きさを見るのか、たんに仕掛品をはじめとするモノなどの集合を指すのか。あるいは W と生産資本の相違や生産過程の局面にある運動体の価値性格を問題にする立場

からPとは生産過程の存在を示す印であり、むしろ括弧付きで(P)と示すべきである、という主張もなされる。

体系的構成との関連2

-----2

資本概念論(「資本」章)においては個別資本の増殖が問題にされるべきであるという山口の指摘はその通りであろう。

冒頭商品の性格の規定の問題にも関わる。単純商品説と資本主義的商品説の選択としてとらえるのではなく、両者の主張のある側面を取って商品一般説を設定してはどうか。

信用は、ここでの評価の問題としての資本価値を前提としており、貨幣と信用貨幣との間の流通根拠の性格の相違があらためて強調されるべきであろう。

おわりに2

-----2

商品の価値、貨幣の価値、資本の価値、企業の価値。

論点2

---2

1) 経済原論体系書の比較。あるいは、ゼミのみなさんは以下の諸点について、どう論じるべきであるとお考えか。

a. 2種類の産業資本的形式の範式、すなわち、「 $G-W \cdots P \cdots W' -G'$ 」と P_m と A を含むもの) がどこで登場しているか。

b. 資本概念の導入はどう行われているか。 $W-G-W$ と $G-W-G$ の比較論か、致富衝動か。

c. 記号 P をどのように定義づけているか。関連して、 $P-P$ 循環の意義づけ。

d. 本報告でいうところの「価値の切れ目」について、触れているか。資本概念に関連づけているか。

2) マルクスの考えは揺れながら変化していたと考えるべきか。価値形態論など関連隣接領域についての所説の変化との関係。